

彩のきずな 栽培暦

適応地域及び作型

- 県下全域の早植栽培地帯、または6月末までに移植可能な普通期栽培地帯。
- 障害型冷害に弱いことから早期栽培は避ける。

病害虫防除

- 減農薬栽培を基本とする。
- 耕種の防除(置き苗の撤去、畦畔管理、ケイ酸資材の投入等)を励行する。
- 紋枯病の発生に注意する。
- 穂もちには強いが、まったく罹病しないわけではないので、葉もちが発生したら、必ず防除する。

中干し

- 有効茎が確保(20~25本/株)できたら、中干しを確実に実施する

施肥

- 基肥の過剰施用は、籾数が過剰となり、登熟期間が不良気象の場合、くず米が増加しやすいので避ける。
- 穂肥施用時の葉色が目安より濃い場合は施用時期を5日程度遅らし、施用量も3割程度減らす。

高温障害軽減のための追肥

- 登熟期に著しい高温に遭遇すると、「彩のきずな」でも白未熟粒発生による品質低下が心配される。早植栽培では移植後30~35日頃の葉色が4~3.5以下に低下した場合は窒素成分で1~2kg/10a程度、普通期栽培では移植後20~25日頃に1kg/10a程度追肥する。

収穫

- 刈り遅れないよう早めの収穫を心がける。特に高温時には、登熟期間が極端に短縮することがあるため、収穫の目安の早いうちに収穫を行う。
- 登熟期間が不良気象の場合、帯緑籾が残りやすいので、出穂後日数、積算気温を目安に収穫を行う。

乾燥・調製

- 高水分籾の高温急激乾燥は絶対に行わない。
- 食味の確保、維持のため、過乾燥とならないよう注意する。(玄米水分15%を確保)
- 調製は必ずライスグレーダ(1.8mm目以上)で行う。

秋耕

- 稲刈後、秋の間に稲わらや籾殻、稲株をすき込む。
- 秋耕を行うことで冬の間に稲わら等の分解が進み、水田の肥沃度向上や、次作水稻のガス害や窒素飢餓の防止となるとともに、温室効果ガスであるメタンの排出が削減できる。

生育ステージと主な作業の目安

早植栽培		4月		5月		6月		7月			8月			9月			
月	旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
生育ステージ		移植 50~60株/坪 2~4本/株		移植期			有効分げつ 決定期		最高分げつ期	幼穂形成期	減数分裂期	出穂期			収穫の目安		
水管理				浅水管理					中干し 間断かん水			深水	間断かん水	落水			
主な作業	播種	施肥 5~7 Kg/10a	土改剤散布	基肥散布・代かき	箱剤散布・移植	除草剤散布		中干し 6月下旬~ 7月上旬頃	紋枯病防除	穂肥施用 ※	穂肥 2~3kg/10a (出穂前25~23日) 幼穂長1~2mm 葉色4~4.5を目安	カメムシ防除①	カメムシ防除②				収穫作業
※前年に稲こうじ病が多発したほ場では、有効な薬剤を散布。																	
普通期栽培		5月		6月		7月		8月			9月			10月			
月	旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
生育ステージ		移植 60株/坪 2~4本/株 疎植は避ける			移植期		有効分げつ 決定期	最高分げつ期	幼穂形成期	減数分裂期	出穂期			収穫の目安			
水管理				浅水管理					中干し			深水	間断かん水	落水			
主な作業	播種	施肥 5kg/10a	土改剤散布	基肥散布・代かき	箱剤散布・移植	除草剤散布		中干し 7月中旬~ 7月下旬頃	紋枯病防除	穂肥施用 ※	穂肥 2kg/10a (出穂前25日) 幼穂長0.5~1mm 葉色4を目安	カメムシ防除①	カメムシ防除②				収穫作業
※前年に稲こうじ病が多発したほ場では、有効な薬剤を散布。																	